

分 科 会 報 告

副課題 1.

心身障害の予防に関する遺伝生化学的・ 生理遺伝学的研究

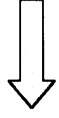
東北大学医学部

荒 川 雅 男

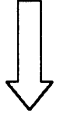
抗生物質をはじめとする治療薬剤の開発, 医療器械の性能の向上, 治療技術の発達感染症を中心とする外因性疾患を近年著しく減少させたが, 反面遺伝的要因或いは個体の内的要因による疾患が相対的に増加し注目を浴びる結果をもたらした。実際の処, 内因性疾患では診断及び治療が容易ではなく, 所謂難病として認識されているものが少なくない上に患者の結婚問題や家族計画にも深刻な問題を投げかける可能性が大である。

しかしこの内因性或いは遺伝性疾患も仔細に検討すれば両親の Heterozygosity の問題や胎生期中の出生前診断更には出生直後のマススクリーニングテストなど診断の方法は幾多開発され, 早期に診断されることによって早期治療が可能となりその結果として治療しない場合に当然予測されるべき心身障害を予防出来るようになった疾患もフェニルケトン尿症をはじめとして既に多数に上っている。

「心身障害の予防に関する遺伝生化学的・生理遺伝学的研究」と題する副課題 1 の研究目的には 250 種にも上る先天的な原因による心身障害(先天性代謝異常症或いは蛋白構造異常による赤血球機能障害)の発生を予防し, 各人が幸福な生活を送ることが可能であるような具体的な方法を確立することであり, そのために以下の如き細分課題を設けて検討を続けてきた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



抗生物質をはじめとする治療薬剤の開発,医療器械の性能の向上,治療技術の発達は感染症を中心とする外因性疾患を近年著しく減少させたが,反面遺伝的要因或いは個体の内的要因による疾患が相対的に増加し注目を浴びる結果をもたらした。実際の処,内因性疾患では診断及び治療が容易ではなく,所謂難病として認識されているものが少なくない上に患者の結婚問題や家族計画にも深刻な問題を投げかける可能性が大である。